

あきらめのわけには

福島第一では、「収束宣言」後も危険な状態が続いている。政府や東京電力は「安全」を強調するが、133一体の燃料棒が保管されている4号



京都大学原子炉実験所助教 小出 裕章さん

こいで・ひろあき
1949年、東京生まれ。東北大学在学中に女川での反原発闘争に触れ、原発をやめさせる研究を続けることを決意。74年に同大学大学院博士課程修了。同年から現職。著書に『隠されるる原子力・核の真実』(創文社)など多数。

「たとえエネルギーが足りないとしても、原子弹手を付けてはいけないのです」

「の対象であって、ほかの人方が原子力の旗を振っても関係ありませんでした。嫌がらせを受けたことは一度ありません。それに、自由に研究でき

流れが変わった

7月1日、野田政権は原発存続、再び舵を切った。小出さんの目には、「原発推進派が生き残りをかけて総攻撃して

原発ゼロを求めて

まるで悪夢を見ているようだった。冷却不能、炉心損傷、水素爆発…。いつか事故は起こる」と警告してきたことが現実となつて降りかかる。テレビから流れる東京電力福島第一原発の情報は、唇を噛みしめていた。

「3・11」を振り返り、小出裕章さんは静かに話しかけ始めた。「私は、原発をやめさせるために原子力を研究してきました。事故が起きないように、私にできることをしたつもりです。だからこそ、原子力の専門家として事故を防げなかつたことを本当に申し訳なく思います」

故郷を追われた人々、骨と皮だけになつて餓死した家畜、汚染された海と大地に思いを巡らし、悔しさを怒りをにじませる。

福島第一では、「収束宣言」後も危険な状態が続いている。政府や東京電力は「安全」を強調するが、133一体の燃料棒が保管されている4号

機のプールは、爆発の影響で外壁の大部が損傷。大きな余震が起これば崩壊する可能性がある。1・3号機では、炉心がどこにあるのかさえ分かっていない。

「歯医者さんで使用するセラミックのように、核燃料もセラミックで焼き固めています。280度で溶けますが、圧力容器の耐熱性能は150度。燃料は圧力容器に大きな穴を開けて落とす。床は30kg残っていると

「試算」を基に、権力者は「計画停電を回避する」と叫び、「ウソ」と「脅し」で再稼働を決定

「原発が生み出す電力を全て火力発電で賄つたとしても、火力発電の設備利用率は7割にしかな

だ。小出さんは、「停電なんか絶対しない」と強調し、パソコンでデータを示した。「原発が生み出す電力を全て火力発電で賄つたとしても、火力発電の設備利用率は7割にしかな

だ。」ことなど、原発事故の悲惨さを目にしながら、被災者や国民を裏切るように各地の原発再稼働の動きが加速する。過大な電力需要の予測で、過小評価された電力供給量。電力会社の

「大飯原発の再稼働を尋ねると、『大飯だけが危険なわけではない。事故は予想を超えて起る。それが福島第一の教訓です』といつたん言葉を切り、原発事故の被害に思いを馳せながら、こう続けた。

「たとえエネルギーが足りないとしても、原子弹手を付けてはいけないのです」

1970年、原発建設で揺っていた宮城県・女川町。「原発が安全と言ふけれど、原発が安全と言ふのなら、なぜ仙台に造らなかったのか。住民から投げかけられたこの問い合わせが、当時、東北大学工学部原子核工学科の学生だった小出さん的人生を決定付けた。原子力の平和利用を夢見ていた青年が、初めて疑問を抱いた瞬間だった。原発は都

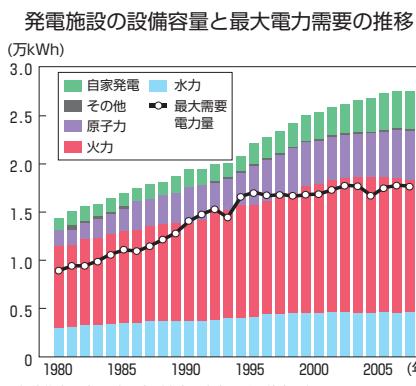
で、原発の危険を問うことが、言わば「撃破り」のようなものだ。大勢に抗う研究は、困難を伴う。73年には、就職が決まり、原発政策を進めれば進むほど、脱原発を求める声が急速に広がっていく

研究室では電灯もエアコンも付けずパソコンと向き合う

東京では首相官邸前に20万人が集まったり、大规模な集会が開かれたりするようになった。政府が原発政策を進めれば進められるに越の利はない。折角、握り締め、言葉に力を込める。原発を廃絶をあきらめるわけにはいかない。時折、拳を握り締め、言葉に力を込める。原発を廃絶をあきらめるわけにはいかない。時折、拳を握り締め、言葉に力を込める。



主張していますが、見てきたのかと言いたい。現場は今も手探りの状態で、事故は続いている



りません。日本ではそれほど電力が余っているのではなく、原発推進派は、夏のピーク時の電力不足を指摘しますが、これもうなづかっています。1990年代後半から現在まで、最大電力需要が火力発電と水力発電の合計以上になったことは一度もない。原発が足りないことです。

そこで、もう一つの問題

志ある声広がれば廃絶できる

かくして、野田政権は原発存続、再び舵を切った。小出さんの目には、「原発推進派が生き残りをかけて総攻撃して

7月1日、野田政権は原発存続へ、再び舵を切った。小出さんの目には、「原発推進派が生き残りをかけて総攻撃して

きた」と映る。「原発を廃止するのだから始めること大切です。このまま大きな声が大きくなれば、原発を廃絶せざることができます」信念を貫き通して43年、穏やかなまなざしの奥は、未来を信じる力強